



文=伊藤哲也
写真=亀卦川 英樹

年の瀬のあわただしさを逃れて、どこかで静かに過ごしたい。できれば海を眺めながら、ゆっくりグラスなど傾けたい。そう思って、南へ向かう特急に乗り込んだ。函館駅で下車し、函館朝市で今夜の酒肴を買う。



渡島当別駅に着いた列車。車両の色合いがシックだ。

函館駅に戻り、道南いさりび鉄道で渡島当別駅に向かった。この駅から徒歩約十五分、高台にある「当別 風の丘」が今回の宿である。敷地内には、土日・祝日はカフェとなるセンターハウスがあり、その周囲にログハウスが三棟、十月にできたばかりのコンテナハウスが一棟。さらに建設中のログハウスもあり、現在進行形の宿泊施設である。

一緒に建ててくれる仲間を募集し、参考書を頼りにこのセンターハウスを建てた。「毎週末、仲間たちと飲んで食べているうちに、パーベキューハウスも、宿泊用のログハウスも、と建物が増えていきました(笑)。民泊が可能になっ



◎第二〇五回 渡島当別駅



渡島当別駅の内部。ステンドグラスや聖像、トラビスト修道院の写真が、この地の歴史を語っているようだ。

薪ストーブの燃えるセンターハウスで、オーナーの藤山幸伸さんが、静かに語り始めた。
「二十年ほど前、ここに自宅を建てたのがきっかけで、近くの山を買うことになりました。そこにはかつて植林された立派な杉があったので、それを自分たちで伐り出して、ログハウスづくりを始め

たのを機に、宿泊業を始めました」と藤山さん。
自分の山の木を伐り、皮をむき、乾燥させ、切断し、組み上げていく。時間と根気のいる、何とスケールの大きな遊びだろう。藤山さんは函館で運送会社を営んでいたが、ここでの活動はプライベートとして、社員にも知らせなかったという。「会社の経営を次代に譲り、今は



センターハウスのテラスから眺めた海。対岸の下北半島がうっすらと見える。



バーベキューハウスでの忘年会(?)。向かって右から、スタッフの村田桃子さん、工藤さん、藤山さん。バーベキューは別料金(1人2,000円～)で、事前に予約が必要。今回は特別にスタッフの皆さんと一緒に夕食をいただいた。



基本的に食事がついていないので、食べ物もお酒も持ち込み自由。函館朝市の貝の造り、イカ飯、フライドポテトをつまみとして楽しんだ。



当別 風の丘のスタッフの皆さん。背後のセンターハウスは、土日・祝日はカフェとして営業している。手作りした窯で焼くピザが評判だ。

起床は午前三時半、就寝は午後八時。その間に祈りと労働、勉学の時間が決められている。俗世に生きる身にはとてもまねできないが、それを知るだけでも少し身が引き締まる気がする。

駐車場そばの緑地に、三木露風の詩碑があった。露風は近代日本の代表する詩人のひとりであるが、

翌朝はトラピスト修道院の周辺を散策した。この男子修道院で生活する修道士たちは、厳しい戒律を守っている。そもそも修道士とは「神だけに向かって生きる者」だという。

風の奥にあるバーで、今度はゆっくりグラスを傾けた。

風の丘一筋。でも、私はここも早く次の人たちに任せ、好きな鉄道の旅に出たいんです」と笑う。うれしいことに、小誌の愛読者でもある。タッフの皆さんと一緒にバーベキューの夕食となった。肉と魚介類、野菜もたっぷり。もちろんビール、そして日本酒も。静かにグラスを傾けるはずが、にぎ



ログハウス(北欧館)の内部。広々とした空間に木の香りをを感じる。ミニキッチン(電子レンジあり)や、海を眺めるバーカウンター、バーベキューハウスも備えている。



夜はイカ釣りの漁火がテラスや部屋から見える。ロマンチックなクリスマスを過ごせそう。

やかな忘年会となった。

当別 風の丘の営業担当、工藤世一さんは「自然、手作り、感動が風の丘のコンセプト。ドッグランやキャンプ場もあり、音楽イベントなどでの交流もしています」と言う。カフェの営業も仲間によるものだ。単なる飲食・宿泊施設ではなく、地域のコミュニティの核にしたいという皆さんの思いが伝わってきた。食事の後はセンターハウスの奥にあるバーで、今度はゆっくりグラスを傾けた。



(左)木々に囲まれたトラビスト修道院。(右)例年12月中旬からクリスマスには、トラビスト修道院へと続く並木道がライトアップされる(写真提供:北斗市)。●トラビスト修道院／北斗市三ツ石392。12月24日の聖夜のミサ(23:45～)には、誰でも参加できる。

一九二〇年(大正九)から四年間、ここで文学を教えた。日本の心を教えたとも言える。「夕焼け、小焼けのあかとんぼ」で始まる有名な「赤とんぼ」という詩も、この地で生まれた。

詩碑には「日は輝かに沈黙し時はおもむろに移り行けり美しき地上の断片の如く我命は光の中にいきづく」と刻まれている。露風はここで、夫人とともに

にカトリックの洗礼を受けた。

修

道院から四十分ほど歩くのだが、「ギャラリー日の丘」

という看板を見つけ、訪ねてみた。ギャラリーの主は上田雅さん。亡くなったご主人の上田公夫さんの木彫作品などが展示されている。

雅さんは「私の趣味は手作りのホウキ。ホウキモロコシという植物を栽培して、その枝で作っているの」と、明るく笑う。ギャラリーは冬季閉館し、来年の開館も未定だが、敷地の先がいささび鉄道の絶好の撮影ポイントだという。

突然の訪問にもかかわらず、上田さんには地元の景色や季節の移り変わり、野鳥などの魅力をたく



三木露風の詩碑。この碑の近くの露風旧居跡に、北原白秋が詠んだ詩碑(「つつましく君が住みけむ跡どころ 谷沢越えて我は見に来し」)がある。



(左)ギャラリー日の丘の敷地に建つ、上田さんのホウキづくりの工房。オンドルで暖房している。(右)ギャラリー日の丘の敷地内で撮影した朝の1シーン(撮影:上田雅さん)。海沿いに道南いさび鉄道の鉄路が続く。

●ギャラリー日の丘／北斗市三ツ石347 ☎0138-75-3557

さん教えていただいた。渡島当別は、一度会ったら仲間になってしまいうような、居心地の良さを感じさせてくれる場所だった。